

与だ。

だから、負けてから給与がよくなった。戦争中は食料
なしかつたから。我々は、ラングーンの飛行場のところ
から汽車で港へ出て、二十一年五月二十八日、田辺港へ
上陸して、同時に田辺の分院に入院して四日間。後遺症
で十分首がまがらぬ。機能障害が残ったが復員した。

実家では、兄が戦死していたので、あまり甘えて療養
はしていられず、お陰で二十七年になって日本舗道に入
社した。

〔荒川〕

私は内地に帰ったが四〇五年マラリヤで苦勞した。体
がふるえて止まらない。高い熱がつづいて悩まされた。
三日熱だからよかったが、熱帯熱だったら死んだらう。
その後、親のやっていた船大工を引きつづいてやって
る。

〔増田〕

歩兵は行軍がひどい。屋根のしたで寝られず野宿だ
し、入浴もない。お陰で水虫をもらって来た。あの苦勞
は自分でやった者でなければわからない。同僚がなく

なったのでなにもいえないが、生きていればこそその今日
だが、やはりひどさは忘れられないし、報いはないの今
日だ。

末期的ビルマ作戦死境を越えて

新潟県 五十嵐 新一郎

私は大正二年九月十六日生まれなので、昭和八年徴集
です。当時は軍縮時代だったから身長が少し足りない短
尺甲種ということで第二補充兵でした。しかし、十八年
六月五日召集され、第二師団の補充隊輜重兵第四二連隊
第一中隊に編入され、王城寺原の練兵場で、四か月間の
教育を受けました。

九月二日、門司出帆、仏印に上陸、飛行場近くで約一
か月待機、船で昭南島へ行って、ガダルカナル引き揚げ
の第二師団（勇兵団）のくるのを待つて補充になった。

一年配で家族の方々を置いて、いよいよビルマ戦線に
ぶちこまれたわけです。

そうです、貨物列車に乗せられて泰のバンコックへはいり、列車で北上してマンダレーを越えインドウへ、鉄道沿線は焼野が原だったが、その時はまだ大丈夫だった。

チンドウイン河を渡って、マユ山脈を越え、アラカン山脈をこえて、インパールのさき、コヒマの手前まで行った。前進タタで、もう兵站線は切れ、弾薬も糧秣の補給はないのだから食べる物はなくなっていた。

そこで転進作戦にはいった（英・印軍の反撃はげしくなり撤退）。インドウからでも五、六百公里はあるか、随分山奥まではいったうえに敵の兵力は大きい。攻撃はげしい。私は死ぬ覚悟していたが、山のなかを歩く、雨のなかで寝るのだから体は濡れっぱなしだった。体をかわかしたいが谷間は歩けない、山の中腹では雨で火はたけない。

立枯の木に落葉を敷いて、マッチはぬれてだめなのでライターしか使えない。ゴムのチューブを細かく切って背囊のなかに入れておいたのにライターで火をつけ、落葉や立枯の枝を集め、ようやく火がつくと、敵機が低空

飛行で来て全部機銃掃射を受ける。ブーンとくれば火を消さねばならない。ようやくの火を消したりで、その時の気持は切なかった。

靴は破れ、口が開いている。足が痛くて、それでも歩かなければ落伍するか捕虜になってしまう。腹がすいているので、水たまりがあると、すこしでも食糧をフヤカしてたいて煮こんで、泡のようになった藻のようになった。鼠でも、葉でも、たべられる物はなんでも食べた。私は体が丈夫でなかったので、持ち物は捨てて身を軽くしていた。

何千里離れたところへ来て、死ぬことは覚悟していたが、日本へ一步でも近づいて死にたい。歩けない戦友を、私はたたいた。たたかれると反抗心が出て気を取りなおす。「駄目だ」といった者、気力のない者はだめになってしまう。私も、妻子がなければ、生きて帰ってはこられなかったでしょう。

雨のなかを、食糧がなく、フラフラして迷ったこともあったが、自決しようとは思わなかった。一步でも妻子のいる日本に近づこうと思っていたから。放浪者のよう

に部隊を求めていた時、他中隊に助けられた。河を渡らなければ帰ってこれない。最後はフミネ（ビルマサガイ
ン州、中部印緬国境附近）に集結し、ようやく中隊に合
流した。

チンドウイン河にロープを張って、それをつたいなが
ら向こう岸へ渡った。各中隊を工兵隊が渡してくれたの
です。

思えばインド、ビルマ、警作戦、イラワジ河作戦、マ
ンダレー、メーカーテラ作戦と、食糧、弾薬はなく、輸
送はほとんど徒歩で、毎日が撤退作戦の連続でした。

マンダレーは平地に小高い山があり、寺がちらなって
いて、パゴダがあり、我々は王宮に立てこもっていた。
連隊長は、としをとった人だった。パゴダが砲撃されこ
われてきた（部隊は撤退中バラバラになり、四度も臨時
編成されたが、最後は各兵科が一つになった）。

敵の攻撃は朝は八時半から夕方五時までで、夜になれ
ば帰っていく。そして、三方はかこむが、一方はあけて
おく。今考えると、英印軍は自分の方も、日本軍が反撃
して損害が出るのを恐れていて、まあ逃げる（撤退）の

を待っていたのかも。

夜、水をくみに行くとき敵の声が聞こえる。一番駄目だ
と思ったのは、切りこみ隊をつくった時です。抜き身の
剣、地下足袋をはいて、手榴弾を腰にブラさげ、鉢巻き
をしめて、自分が自爆して敵のなかへ飛び込む。「もう駄
目だ」と思っていたが、出る二時間前中止となり、命拾
いをした。やれやれと思った夜だった。

翌日、敵がしたからのぼって来て、敵の声が近くに聞
こえる。彼等が話をしているのだ。その時連隊長が刀を
抜いて「おい」と声をかけられた時、前日助かったのに
「もう駄目」と思った。敵はこちらの逃げるのを待ってい
る。突っこんではこない。夜になると引き揚げて行く。
連隊長の独断だと思うが「さがれ」といってさがったが、
我々は幾人もいなかった、二十人ぐらいでしたか。

マンダレーでも撤退作戦をやりながら南下、キャウ
セーピンマナートンギーへ来て、シットン河を渡って、
サルウイン河口のモールメン、そして泰にはいって、終
戦はコーカレイでした。その後、道路工事等をやって、
二十一年の六月乗船して帰国したわけです。

当時のこと、転戦々々で、しかも指揮官ではなかった
のでなかなか順序立てて説明ができないので、同一行動
をした人たちの、兵籍簿や戦中日記などを抜粋して申し
ます。

戦中日記

昭和十八年

十月十一日 昭南港入港

十二日 一六キロ行軍、宿宮地競馬場に着

く。

十二月 二日 再び泰国に向って出発。

六日 泰国「チンボン」着。

十三日 「カハーヂ」着。山中にて人馬進ま

ず。野猿頻りに鳴く。

三十一日 毎日の行軍々々にて熱発その他の患

者続発。

昭和十九年

一月 一日 雑林の中にて新年を迎える

十一日 「イエ」着。百余里の行軍、毎日睡

眠不足、十五分の小休止にも寝込

む。

十四日 漸く「モートルメン」着。兵站病院に

四人入院。

二十九日 マルタバン着。この間、患者続発す。

「クメロード」「アマラプラ」「トン

グー」「ミッター」へ。

二月 四日 朝九時「マンダレー」駅着。人馬下

車。敵機来襲毎日あり。

十五日 「ヒマラヤ山系」「アラカン山」に向

い前進続く。熱発患者一二人。

二三日 六人、第二野戦病院に入院。

二四日 第一梯団の我々第二小隊佐藤中尉以

下百余名は中央突破して烈部隊（第

三十一師団）の配属指揮下に入る。

「ピンボン」出発、相変わらず暗夜行

軍。糧秣二十人分携行。野象・山

犬・虎等多く生息する。（ヂュピー

山系）

三月 三日 「ウユ」渡河点着で機銃掃射に遭い

重傷三人。

八日 「チャンソン」北方二キロ地点、「チ

ンドウイン河」六キロ手前

十七日 アラカン山系に入る。言語に絶する

難行軍、山また山。毎日爆撃あり。

食糧欠乏、後方よりの輸送見当つかず（敵機糧道を断つ）。糶を購入し鉄

帽で撞いて米にする。野菜欠乏症にて脚気症状、全身浮腫する者多し。

雨期近づく。

六日 山砲隊配属を解かれ師団輜重となる。

五月 糶を撞いて精米し飢餓を防ぐ。塩も

極端に欠乏。

十八日 平沢少尉戦死

三十日 この間当隊の犠牲多く出る。十二人

戦死、戦傷者多数―ヂユサミ戦闘。

六月十三日

「ガチヒマ」出発。患者二十五人携行、「サンジャック」に向かう。毎日

敵機に悩まされる。

二十二日 第一〇七兵站病院に患者を入院さ

す。

九月 軍靴も被服もなし。転進続く。

三十日 「アマラブラ」着。

十一月 八日 中隊本部「ピンチャイン」部落へ移

動。

昭和二十年

二月 「アマラブラ」「メウハン」「キャウ

セ」「ノベイワ」「ラングーン」「ピン

マナ」。

十日 「トングー」。

十一日 「ラングーン」。

十七日 「ペグー」着。

二十一日 「ビュー兵站」を経て「トングー」

着。

二十六日 敵装甲車約二百車両・歩兵等、「サ

ガイン」方面に現われる。軍は肉弾を以って是に当る。「ビルマ方面」四

面敵軍。友軍機飛ばず。

三月

混乱状態。

七月

二十日 「モールメン」着。

十五日

チンドウイン河渡河、アラカン山中に深く入り、食糧なく困苦欠乏、死線の毎日。「雨期の「アラカン」難路を漸く脱して「カドマ」着。

二十六日

内地の爆撃急なるを聞く。の姿が我が皇軍の姿。「マラリア」地帯にあり。

四月 九日

事実証明書、病床日誌、其の他の控、焼却す、雨期に入る。

二十八日

六十人本隊追及者「コーカレ」より来る。石鹼・タオル・鉛筆等、少量の酒、配給あり。

十四日

「トングー」北方七里地点着。

十七日

モチ鉱山三里地点宿営。横山軍曹以下十二人と合流す。

八月 二十日

休戦の大詔下る。

五月 三日

追及者（昨年十一月以来部隊を離れていた）中隊復帰す。

九月 八日

二百三十桂慰霊祭。涙を秘めて読経。

十三日

転進々々標高七千メートルの山岳地帯、言語を絶する難路、岷々たる山道を上り降りす。

十月 三十日

「チンドウ」にて表面上の武装解除。「ムドン」南方四キロ地点、ゴム林の中。この地区内に二万五千人の皇軍、英軍の指揮下に入る。

二十一日

五十四隊と合流。

十二月

ゴム林内の生活続く。

六月 八日

七人入院。「コーカレ」で熱発者多数出る。

三十一日

月暗し 配所の窓や 年の暮
ゴム林で 待つ船遠し 日の長さ

昭和二十一年

一月 ゴム林落葉、丸裸となる。

五月 七日 ビルマ方面軍に入りてよりの戦没者

の追善法要「テナセリム」地区にて
挙行。

二十日 この頃、雨期たけなわとなる。

七月 十二日 召集解除。

亡き戦友の靈にこうべをたれてその冥福を祈る。残る
我等も白髪をまじえ、腰はまがり、老境にいる。諸行無
常である。
(僧侶桑原宏右記)

戦時名簿

一月 二十日、昭南港上陸。二月 四日馬来泰国境通過。

二月 十二日泰緬国境通過。

自昭和十九年一月十日至同年九月十二日ウ号作戦並に

次期態勢移行ノタメノ作戦。

四月 十三日 緬印国境通過。七月 十六日印緬国境通

過。

自九月十三日至同二十年一月十六日盤作戦参加。

自一月十七日至四月十三日「イラワジ湖畔」ノ会戦並

ニ「メーカーテラ」附近ノ会戦参加。

三月 一日昭和二十年軍令陸甲第二八号ニ依り陸上勤務

第一三三中隊編成下令並ニ復帰下令。

三月 十日同中隊ニ編入。同日編成完結。

自五月二日至五月三十一日克作戦参加。

自六月一日至八月十四日堅作戦参加。

昭和二十一年六月二十四日「モールメン」出帆。

同年七月十日大竹上陸。七月 十二日復員完結。

同日召集解除。

(須藤初男)